

論文の内容の要旨

論文題目 修辞学的崇高の系譜学 —— ロンギノスから現代へ

氏名 星野 太

本論文は、西洋における「崇高」概念の起源とされるロンギノスの『崇高論』を、その後世における受容も含めて包括的に研究することをめざすものである。それを通じて、現在ではほぼ美学上の概念として定着している「崇高」のなかに、「修辞学的崇高」と呼びうる系譜を探り出すことが本論文の最大の目的となる。

本論文は以下の三部から構成される。古代ギリシア・ローマの哲学・詩学・修辞学との関連を踏まえつつ『崇高論』の内容を論じる第Ⅰ部（一、二、三章）、西洋におけるロンギノスの本格的な受容が始まった十七世紀から十八世紀にかけての主要な崇高論を検討する第Ⅱ部（四、五、六章）、そして二十世紀後半に生じた「崇高」の脱構築的読解を検討する第Ⅲ部（七、八、九章）——以上の三つの時代における『崇高論』の成立・発見・変容のプロセスについて論じることで、本論文では、古代のロンギノスから現代にまでいたる「修辞学的崇高」の系譜を描き出すことを試みる。

本論文の第Ⅰ部「『崇高論』と古代」においては、ロンギノスの『崇高論』を古代のさまざまな文脈に照らし合わせつつ検討し、そこに含まれる哲学的な問いを、主に三つの議論に絞って提示した。以下に述べるように、総括的に言えば、それらはいずれも修辞学、さらには言語行為一般における「媒介」をめぐる問題にこそかかわっている。

まず、第一章「真理を媒介する技術——「ピュシス」と「テクネー」」においては、古代ギリシア哲

学においてもっとも重要な概念に属する「ピュシス」と「テクネー」が、『崇高論』においていかなる役割を与えられているのかを検討した。『崇高論』においては、たんなる詭弁のための技術としての修辞学にとどまらず、「ピュシス」それじたいを明るみに出すという根源的な「テクネー」としての修辞学のあり方が——その危うさも含めて——提示されていることを明らかにした。

次に、第二章「情念に媒介されるイメージ——「パンタシアー」と「パトス」」においては、『崇高論』における——「イメージ」「表象」「現われ」などに相当する——「パンタシアー」の概念を重点的に検討し、そこで提示されている「パンタシアー」の具体例が、狂気や幻覚に代表される非合理的なヴィジョンに集中しているという事実を明らかにした。そして、語り手の「パトス」によって聞き手に媒介されるこの「パンタシアー」の概念のなかに、「パト斯的イメージ」とでも呼びうる特異なイメージ論の萌芽が示されていることを明らかにした。

そして、第三章「瞬間と永遠を媒介するもの——「カイロス」と「アイオーン」」においては、『崇高論』というテキストの顕著な特徴をなす「引用」の布置関係に着目し、それに関連する「カイロス」と「アイオーン」という二つの時間概念の検討を通じて、『崇高論』の理論的かつ実践的な側面について論じた。つまりそこで明らかにしたのは、さまざまな引用の網目のなかを進んでいくロンギノスの議論そのものが、著者自身の重視する「過去」や「未来」との競合を実践的な仕方でも示したものだということである。

以上の三つの章を通じて、『崇高論』という——明確な「体系」を見いだすことが困難な——書物のうちに、たんなる修辞学にはとどまらない哲学的な問題を探り出すことが、第Ⅰ部の最大の目的であった。すなわちそこで試みたのは、『崇高論』をたんなる修辞学的な著作へと還元するのでも、反対に著者自身の崇高なロゴスをただ賛美するのでもなく、そこに見いだされる「媒介」をめぐる思考を明るみに出し、それを近代における「崇高」をめぐる思考へと結びつけることにほかならない。

本論文の第Ⅱ部「変奏される『崇高論』——近代におけるロンギノス」では、ロンギノス的な「崇高」が近代の西欧において発見され、それが美学へと次第に場を譲っていく過程を三つの段階に分けて検討した。端的に言えば、そこで試みたのは、十七世紀以降の『崇高論』の受容と忘却のプロセスをただ歴史的に整理することではなく、ボワロー、バーク、カントにおけるそれぞれの崇高論を検討することで、そこに見られる広義の「修辞学的崇高」の残滓を明るみに出すことである。

まず、第四章「崇高論の「発明」——ボワローの『崇高論』翻訳と新旧論争」においては、近代における『崇高論』発見の最大の契機となったボワローの翻訳（一六七四）および註解を検討した。ここでは、ボワローが同書に加えている恣意的な解釈や操作をひと通り整理したのちに、ロンギノスが提示した「パト斯的イメージ」としての「パンタシアー」を、ボワローがたんなる「装飾」ないし「虚

構」として位置づけなおしているという事実を明らかにした。

次に、第五章「言葉と情念——バーク『崇高と美の観念の起源』と言語の使命」においては、バークの『崇高と美の観念の起源』（一七五七／五九）における言語論を検討し、そこで想定される「パトス」の伝達が、ロンギノスのそれとは対照的に「心像」を媒介としないものであるという事実を明らかにした。また、とりわけ「言語」に照準を合わせた同書の第五部に着目することで、しばしばロンギノス的な「修辞学的崇高」と近代的な「美学的崇高」の境界に位置づけられるバークの著作のうちに、ロンギノスとの理論的な連続性が存在することを明らかにした。

そして、第六章「『美学的崇高』の裏箔——カント『判断力批判』における修辞学」においては、カントの『判断力批判』（一七九〇）における「崇高の分析論」と、その他のテキストで提示される崇高なるものの事例について検討した。そこで明らかにしようとしたのは次のことである。すなわち、カントにおいてはもっぱら感性的なものを通じて把握される崇高な感情は、実のところ「神の言葉」という言語的な契機においてこそ「このうえなく」強く感じ取られるとされている。したがって、カントがみずからの崇高論から排除していた言語の問題は、実はその余白において、「崇高」のもっとも典型的な事例として混入している。そして、『判断力批判』において強く非難されていた「修辞学」の遺産もやはり、カントがこの神（イシス）の言葉に言及するさいに、実はもっとも本質的な仕方で機能しているのである。

以上の三つの章からなる第Ⅱ部においては、言葉を対象とする広義の「修辞学的崇高」が、すぐれて近代的な「崇高」のパラダイムである「美学的崇高」のうちにもなお強く残存しているという事実を明らかにした。つまり、もはやロンギノスからは遠く隔たった議論を展開しているかに見えるバークの崇高論のなかにも、さらにはそれを自身の哲学的な体系へと組み込んだカントの崇高論のなかにも、ロンギノスから脈々と続く「修辞学的崇高」が、それらと不可分なかたちで棲みついていたということである。

第Ⅲ部「崇高なるパラドクス——二十世紀における「崇高」の脱構築」においては、現代においてふたたび発見されたロンギノスの「修辞学的崇高」が、もはや狭義の修辞学ではなく、テキストすべての領域に広がるものとして捉えなおされるさまを、いくつかの主要な事例を手がかりとしつつ明らかにした。

まず、第七章においては、ミシェル・ドゥギーの「大言」（一九八四）から出発し、そこからドゥギーの詩学に見られる特異な崇高論の内実を明らかにした。ドゥギーは、同時代の多くの論者がバークやカントの「崇高」を取り上げたのとは対照的に、古代のロンギノスから出発しつつ、「崇高」をめぐるみずからの詩学を提示する。そして、言葉の「贈与」を通じた思考の「誇張」として「崇高」を

捉えなおすことで、それに「放物線状の超越」という特異な形象を付与するのである。

次に、第八章においては、フィリップ・ラクー＝ラバルトの「崇高なる真理」（一九八六）から出発し、その中心をなす「光」の形象と、そこから導き出される芸術哲学としての「崇高」の内実を検討した。そこでラクー＝ラバルトが「崇高」に与えるのは、それなしには「美」が「美」であることすら不可能になるような、芸術の本質的な起源としての性格である。だが、そのように理解された「崇高」は、「美」の可能性の条件としての使命を成就すればするほど、みずから退隱することを余儀なくされる。つまりそこでの「崇高」は、ラクー＝ラバルトが言うところの「誇張法的なパラドクス」をみずからのうちに含みもっているのである。

最後に、第九章においては、ポール・ド・マンがたえず関心を寄せていた「修辞学」の内実について検討し、ド・マン晩年の「崇高」や「アイロニー」をめぐる議論のなかに、彼自身が「アレゴリー」という言葉によって特徴づけるような言語の修辞的な機能、すなわち〈その発話主体が意図していないことを言うてしまう〉という根源的な「修辞」のはたらきが見て取れることを明らかにした。さらにそこから、「テキスト」のあらゆる部分に潜むそのようなりミットを、「テクスチュアル・サブライム」という言葉によって名指す可能性を提示した。

以上の第Ⅲ部の目的は、バークやカントによって規定された「美学的崇高」とは枠組みを異にする「修辞学的崇高」の可能性を、ドゥギー、ラクー＝ラバルト、ド・マンらの議論を通じて明らかにすることであった。それは、二十世紀後半の崇高論の流行現象においてさえ、バークやカントの「美学的崇高」の影に隠れて見過ごされがちであった「言葉と崇高」の問題に、あらためて光を投げかけるためである。以上で提示したような意味での「崇高」は、文学的なテキストにおける特異な言葉のみを対象とするのではなく、われわれの用いる言語一般すらもその射程に収めるような、もっとも広い意味での「修辞学的崇高」へとわれわれを導いていこう。